アートプログラム青梅　2006・４th
二俣尾・武蔵野市民の森ワークショップ開催報告書

2006年11月4(土)・5日(日)

特定非営利活動法人
アート農園
NPO United Art Plantation

アート農園

「アート農園」は様々な分野の垣根を取り除き、「文化・芸術」の重要性を注視し、メティエ・エ・クリティーク（理論と実践）を基本理念においた、社会生活全般にかかわる総合的な文化研究機関として2004年10月に発足いたしました。 文化・芸術を深く理解し、地域社会に積極的に貢献しようとする多彩な人材を講師として招き、特色あるワークショップを通して、かつてなかったかたちの創造的で豊かな地域社会の建設を実現することを目的としています。

これまでの主な活動内容

◎医療法人社団　湖聖会　銀座医院ワークショップ・プロジェクトVol.1
「ふれあい・美術」（東京）を2003年7月23日に開催。
◎医療法人財団　百葉の会　湖山病院ワークショップ・プロジェクトVol.2
「ふれあい・美術」（静岡県富士市）を2004年1月9日に開催。
◎株式会社システムアリカ主催「潜在能力開発プログラム」2004年8月28日開催。
◎アート農園MASC助成プログラム2003年5月～2004年12月まで11名の作家を対象に助成支援。2005年度2006年度もも引き続き継続中。
◎機関誌、都市芸術実際会議経過記録誌『MASC』2001年11月1日発行。1000部。
◎美術雑誌『FACE』2002年9月10日発行。800部。
◎美術雑誌『アートフィールド』2004年11月30日発行。800部。
以降毎年２冊刊行継続中。
◎『アートフィールド』出版記念展　2004年11/6～11/28　画廊「あーとじょいばるば」（東京）にて開催。
◎平成１７年埼玉NPOまつりに展示参加、親子や子供を対象にしたワークショップを開催。2005年5月7日～8日
◎NPO法人資産相談センター主催のセミナーにおいて「アートの効用」について講演会に参加。2005年6月18日
その他美術館やギャラリーに出向き、勉強会を随時開催中。
◎平成17年度埼玉県NPO活動促進助成事業「NPO法人アート農園　収穫の蔵事業夏休み親子林間石彫教室開催。

アートプログラム青梅2006・４th　二俣尾・武蔵野市民の森ワークショップ開催報告

■使用者：特定非営利活動法人アート農園
■使用日時：１１月４日（土）・５日（日）
■主催：アートプログラム青梅2006実行委員会・NPO法人アート農園
■協力：武蔵野市／福田珠子氏／国立東京工業高等専門学校
■場所：二俣尾・武蔵野市民の森／吉川英治記念館
●会期　11月4日（土）～５日（日）
（当初予定していた５日の作品展示は作者が作品を持ち帰ったことにより展示できませんでした。）
●参加作家・スタッフ
山田宴三／山田ちさと／沼田直英／矢部裕輔／羽賀洋子／工藤礼二郎／石井博康／新山光隆／神野八重子／井口奈穂
小松崎広子／羽賀　洋子／崩清明／薄井崇友／三木美帆子／二宮淳／吉田有美子／石井　健／芝章文

2006年11月4日（土）　　参加者：社会福祉法人 二俣尾保育園の園児/福祉施設「とまとの家」の皆さん

特定非営利活動法人
アート農園
NPO United Art Plantation

アートの種で多様な芽を育てる。
豊穣な実りをソサエティーに。

青梅アートプログラム参加報告

アートプログラム青梅2006　「緑化する感性ー街道を読むー」に参加して

NPO法人アート農園代表　芝章文

2005年、アートプログラム青梅「里山と在る」と題されたシンポジウムにパネリストとして参加したことが切掛けとなり2006年、主会場から少しはなれた「吉川英治記念館」と「武蔵野市民の森自然体験館」を舞台にNPO法人アート農園が本展に参加することとなった。当初実行委員会代表の原田丕さん達と青梅市二俣尾の里山にわけ入り、子供の頃に戻ったように自然と戯れ、はしゃいだあと「自然のなかで何かできないだろうか？」と思案したことが参加する動機付けとなった。会員の大半は都会に暮らす人々で、日頃とりたてて「里山」や「自然との共生」について考えていたわけではないのだが、「内なる郷愁」に突き動かされて、自然のなかに包み込まれ、溶け込むことで、新たな発見、喜びを体験することができるのではないないかと考えた。

ワークショップを通して子供達の制作の手助けをしながら、自然のなかで地域の人々とふれあい、まるでリクレーション気分といった感じでまさに「緑化する感性」を地でいくような、楽しいひとときを過ごすことができた。

日常の営みのなかでアートがどれほどの力を我々に与えてくれるだろうか。ワークショップに参加した子供達の無垢な取り組みに接しながら、都会では味わえない素直なこころを取り戻したように感じた。

近年、「大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ」など、こうした地方で町おこし、村おこしを背景としながら「自然との共生」をテーマに多くのプログラムが組まれているが、いずれにしても地域に住まう人々との連携と文化を根付かせようとする企画者側の強い意志が、必要不可欠であることは言うまでもない。吉川英治記念館の展示では参加作家18名25作品を展示することができた。合同展といったそしりは免れないが、ひとまず参加することの意義を見いだせたことが大きな収穫である。今後とも微力ながら応援していければと考えている。

アートプログラム青梅2006参加報告

NPO法人アート農園理事　山田ちさと

東京の北西に位置する、青梅の街に初めて行ってから、かれこれ２年以上になる。東京の北東に住む私の家からは２時間ぐらいかかるので、ちょっとした旅行気分に頭を切り換えないと、とてつもなく遠く感じる。地名の通り梅の生産や繊維の伝統もあるのか、なかなか味わい深い文化のある古い街のようだ。そんな理由もあって、在住している美術家も多いらしい。その人達が中心になって、「青梅アートプログラム」というアートイヴェントが毎年開催されている。

２００６年は我がＮＰＯアート農園もこのイヴェントに参加した。メンバーの作品展示とアートワークショップの開催という二つの形を取った。

アート農園に割り当てられた、作品の展示会場は青梅駅からさらに奥多摩線に乗って４駅ほどの二俣尾が最寄り駅の「吉川英治記念館」である。このあたりまで来ると、東京都とはとても思えない、山と山に囲まれ、多摩川の上流に当たる川が流れるという、静かな山里である。吉川英治は昭和を代表する歴史小説家の一人でファンも多いと聞いている。私も小学生の頃ＮＨＫの大河ドラマで見ていた「新平家物語」の原作者だと言うこと知っていた。豪農から譲り受けた大きな藁葺き屋根をもつ農家が吉川英治の旧家で今の記念館になっている。ここでメンバーの中から20名ほどの美術家が展示をすることになった。

初めてここを訪れたときから私は、この家の南側をぐるりと巡る縁側に明治以降に入れられたと思われる、古いガラス窓が気になっていた。私は「支持体」をひとつのテーマとして作品を作ってきた。この微妙にゆがむガラス窓を支持体にして作品を作ってみたいなーと、考えたのである。結局この窓を使うことは許されなかったが、そのかわり、新館のエントランスに5メートルほどあるガラスの壁を使うことができた。ガラスの壁を支持体にすると言っても、もちろん直接描くことは出来ないので、３０ｃｍ角の透明アクリル板を５３枚ほど使って制作した物をガラスの壁に貼る形にした。エントランスの内側からは記念館のシンボルとも言える堂々とした楠や、大きな藁葺き屋根、そしてその向こうに奥多摩の山々が見える。その風景を自分の作品に取り込みたかったので今回は透明のメディウムだけで仕上げた。そんな訳で思惑通り、展示期間中は私の作品越しに風景が揺らめいて見えたと思う。色彩を一切使わなかったので、展示するまでは不安があったが。うまく周囲とも溶け込んで記念館の歴史にささやかな足跡を残せたと満足している。

もう一つのイヴェント、アートワークショップは会場が「武蔵野市民の森」。「周囲の間伐材や捨てられてしまう木っ端を使用して工作をしよう！」というもの。安い輸入材に押されてこのあたりの林業は今日、壊滅的らしい。やればやるほど赤字になる構造的な問題を抱え、山は荒れ放題だ。

しかし、この奥多摩は実は東京都民の水の出どころだ。山を荒れ放題に放っておいてはそのうちに飲み水にも困る事態になりかねない。そんな問題を武蔵野市の子供達に学習してもらおうと建てられた「武蔵野市民の森」は土地の材を使ったシンプルにして気持ちの良い空間だった。前庭にも木の皮で出来たチップが敷き詰められていて、ふかふかして暖かみがある。そんな環境の中でメンバーと子供達はワークショップとバーベキューを楽しんだ。

参加してくれたのは、下は２才から小学生の子供達。そして近所にある知的障害者の作業所に通っている人々。子供達は青空の下、開放的な場所で木の板や材木の切れ端に歓声を上げた。思い思いに手頃な大きさの材木を椅子にしたりテーブルにしたりして木の板に絵の具を垂らしたり、クレヨンで描きなぐったりして楽しんだ。絵の具のチューブを思いっきり握って板に天こ盛りにする子もいて、見ている方もびっくりするような大胆な作品も産まれたりした。やはり材木という素材そのものにオーラがあるのだろうか、帰るときに自分の頭より大きな材木を両手で抱えて一生懸命持って帰ろうとする子もいてこちらも見ていてうれしかった。製品として、商品として完成された物に囲まれている現代生活の中で、半素材である材木に触るということはどこか物の本質に触れられるような気がするのだが、幼い子供達もそのことにどこかで気が付いているような気がしたのだが考えすぎだろうか？大きい子達は板と板をつなげるのに金槌を使って釘を打ったりタッカーを使ったりして立体作品に挑戦した。最初はぎこちなかった手つきもしだいにコツをつかんで、いいペースで立体物が出来ていく様をながめるのはなかなかに頼もしくもあった。実はなんだかそこで起きていることを全て受け入れられる気分になっている自分に少し驚いたりもしたのである。教室で普段美術の授業をやっている自分とは明らかに違う気がした。

緑豊かな地で木っ端を使って遊んでいると木の香もかぐわしく、そんなこんなでお腹も空く。バーベキューでの焼きそばや焼き芋が格別においしく感じられた。やはり、たまには自然に触れ、大地や野山に「戻る」のは大人、子供を問わず誰にとっても必要なことだろう。現状の経済システムの外で生きていくことはもちろん無理なのだが立ち止まって考えたり感じたり、または体を動かしたりすることは出来る。地球という閉じられた環境の内側でこれからも何とかうまくやっていかなければならないことは自明であるのだから、こうしたささやかな活動に参加して、ときどきシステムの外周部に佇んで見るのはむしろこれからは自然なことになっていくのだろう。透明な私の作品がその環境になじんだときの一瞬のじんわりとしたうれしさと、無心に子供達と一緒に木っ端と戯れている時の静かな安らぎはどこかで通底しているのかも知れない。

吉川英治記念館

吉川英治記念館「草思堂」を望む

庭園風景

吉川英治記念館作品展示風景

崩清明作品

山田ちさと作品

吉川英治記念館作品展示風景スナップ

草思堂展示室

ギャラリー入り口より

手前の立体作品　左／矢部裕輔　　右／三木美帆子
奥左の作品から　吉田有美子・沼田直英・薄井崇友

展示終了

吉川英治記念館作品展示風景

奥の作品右から　二宮 淳・山田宴三

右奥の壁面左から　小松崎広子・工藤礼二郎

右端の椅子の作品　石井 健　奥左　井口奈穂　中央　新山光隆

左から　芝 章文・羽賀洋子・石井博康・神野八重子

武蔵野「自然体験館」ワークショップ会場風景

二俣尾・武蔵野市民の森「自然体験館」

建物

建物ではさまざまな自然体験プログラムを楽しむ
ことができます。
天井が高く風通しの良い室内には畳スペース、
トイレ・シャワーも完備しています

畑

建物の隣には２３５平方メートルの畑があります。
採れたての野菜を敷地内で調理することもできます。

武蔵野「自然体験館」二股駅周辺

二俣尾駅に到着する青梅線

JR二俣尾駅前

奥多摩端　青梅市二俣尾（右側）と柚木町の境

武蔵野「自然体験館」ワークショップ風景

近くの山林から切り出した間伐材を作品の材料として加工しています。
（東京工業高等専門学校の裏山から切り出された間伐材を大量に頂きました。）

社会福祉法人 二俣尾保育園の
園児の皆さんが来てくれました。

武蔵野「自然体験館」ワークショップ風景

作品をつくる材料をさがしています。

材料が決まったら園児たちは
思い思いにクレヨンや絵の具
を使って絵を描き始めました。

武蔵野「自然体験館」ワークショップ風景

福祉施設「とまとの家」の皆さんも参加してくれました。
皆一生懸命作ってくれました。

武蔵野「自然体験館」ワークショップ風景

作品もそろそろ完成です。

親子で楽しい作品作り。こんなにステキな作品ができました。

ワークショップ完成作品

東京高専の裏山で伐採した椚で作った記念の作品「椚の風紋」です。

子供達が一生懸命作った作品です。

ワークショップが終わって

ワークショップのあと、大人も子供もそろってバーベキューをやり、
焼きそばや焼き芋をごちそうに、たのしく歓談しました。

ワークショップで作った作品は
それぞれのお家に持ち帰って頂きました。

特定非営利活動法人
アート農園
NPO United Art Plantation

United Art Plantation
〒333-0866
3879 SHIBA KAWAGUCHI-CITY,SAITAMA-PREF JAPAN
TEL／FAX 048-269-4965
http://www.artnouen.jp/
http://red.sakura.ne.jp/~masc/index.html